

【随 筆】

タンチョウの保護に思う

住 吉 尚

(釧路支部)

私がクマ牧場を辞めて釧路に来たのは昭和50年のことです。この頃、タンチョウの生息数は300羽程度で、10年間ほど個体数の増加が見られませんでした。それがその後の保護活動の成果でしょうか、現在では個体数の推定値が2,000羽ほどになりました。これを受けて、昨年末にIUCN（国際自然保護連盟）がタンチョウの絶滅が遠のいたとして絶滅危険度を1ランク下げましたね。これに対して国内のタンチョウ保護関係者はあまり良い反応を示しませんでした。でもこれは国内のタンチョウ保護にかかわる人たちの努力の成果であり、もっと喜んでも良さそうですね。私はもろ手をあげて万歳をしたい気持ちですがね。多くのタンチョウ保護にかかわっている人たちが、あまり喜ばなかった理由のひとつは、大陸産タンチョウでは減ってはいないものの増える傾向にはなく、現状維持がやっとの状態だとか。これでは北海道のタンチョウが増えて絶滅の危険度が下がったことを理由に、大陸でのタンチョウの保護が手薄になってしまう危険があり、危険度ランクが下がったことを簡単には喜べないのです。でも種としてのタンチョウが絶滅を免れたという点では北海道の努力は大きなものがありますね。

ただこれを別の側面から見ると違うタンチョウが見えてきます。それは皆さんが知っている有名な希少動物であるタンチョウとかシマフクロウと言う動物に、その動物が暮らす自然環境を代表してもらい、その動物が暮らせる自然を保護しようと言う考えから、湿原の代表としてタンチョウを選んだと言う関係者の思いがあるからです。シマフクロウは大変シビアな環境依存型の鳥です。なので今でもなかなか増えませんね。でも少しずつずつが増えていきます。これはシマフクロウが暮らせる環境がほんの少しですが増えたと言うことでしょう。でもタンチョウは違ったのです。タンチョウは産卵こそ水辺であることに執着しますから、湿原が必要に見えますが、実際はほんの小さな池の縁で産卵している個体が多いのです。しかもヒナを育てるところは畑や牧草地が多く、農家の堆肥山でミミズを取ってヒナを育てている家族が大半です。タンチョウがこの環境の変化にうまく適応した

ことから、タンチョウを保護すればそれなりの湿原が保護され、その環境に依存する多くの動物が保護されるだろうと考えた多くのタンチョウ保護の関係者にとっては「少し違うよなー！」と感じているのです。タンチョウと言えば湿原の神、神聖な鳥のイメージがありますよね。それが保護の結果として、今ではニワトリ状態となっているのです。それだけタンチョウが環境の変化に順応できる鳥だったと、今頃になって気が付いたということでしょう。このタンチョウに抱いた最初のイメージと、現実のタンチョウの暮らしのギャップがタンチョウ保護活動家を困惑させる原因でしょう。そして、これがタンチョウの保護活動をしている人たちが今回のタンチョウの絶滅危険度の1ランク下げについて、もろ手をあげて賛成できていない大きな理由です。タンチョウだけが絶滅を免れても湿原のような環境で暮らすほかの動物、例えばヨシゴイやクイナの仲間など目立たない鳥たちにとっては、「私たちはどうしてくれるのよー！」と言っているような感じが残っているのです。



道路脇で抱卵中



これも道路脇です

どうしてこんなことになったのか？大陸で暮らすタンチョウの様子を知ると見えてきます。そしてなぜ大陸では北海道ほどタンチョウが増えないのかも分かってもらえると思います。アムール川の北岸に広がる東シベリアの大湿原で暮らすタンチョウはどんな生活をしているかと言えば日本とは大違いです。延々と続くシベリアの大湿原です。タンチョウは、この湿原の中でも大きく水がたまったところの真ん中で、巣材をたくさん集め大きな巣を作っています。これはタンチョウの最大の天敵であるシベリアオオカミから巣を守るためだとか。大陸ではオオカミがタンチョウの最大の天敵だったなんて私も知りませんでした。タンチョウが子育てをする6月、ヒナはまだ飛べませんから、オオカミに見つかればひとたまりもありません。そしてこの時期は親鳥も換羽期です。タンチョウは両翼の風切り羽を一度に落として新たな羽が生えてくるまでの間は飛べません。こんな時オオカミが襲ってきたら、タンチョウがいくら速く走っても逃げきれないでしょう。それでなるべく大きな水がある場所で繁殖し、子育てををすると言います。オオカミがいない北海道のタンチョウは小さな池の辺りでも充分繁殖に成功しているのです。キツネなら2羽の親鳥で充分追いつくことができるでしょうが、相手がオオカミなら親鳥も簡単に食べられてしまいますからね。こんなことがタンチョウの繁殖行動が大陸と北海道での大きな違いに出てきているのです。皮肉のようですが、シベリアにもっと人が多く住み、牧場が増えるとオオカミが減ってタンチョウが増えるのでしょうか。でも一方では、オオカミも保護したいですよね。こんなことから、自然保護はどうやっても難しいことばかりですね。もしかすると「あまり急激には増えない」のが正解かもしれません。でも絶滅を防いだのだから保護は大成功だったと言えますよ。

現在の北海道で暮らすタンチョウは、春先に溜まった小さな池の縁や湿原の中のハンノキ林など、こんなところで！と言う場所で繁殖しています。ヒナが孵ると農家周りに移動して、主に堆肥山でミミズや昆虫を食べています。私が知っているタンチョウの家族は太平洋に面した潟湖で繁殖するのですが、ヒナが孵るとほどなく直線で3kmも離れた農家にヒナを連れて行きます。酪農学園大学の寺岡教室にタンチョウの血液の他に糞も送り、糞に含まれるDNAを分析してもらっています。そこでの分析結果は、思いの外に昆虫のDNAが多く検出されているのだとか。少なくともタンチョウの主食は魚ではありません。昆虫、ミミズなどの土壌動物、そして穀物なのです。さて、タンチョウに寄って来られることになっ



農家周りで子育てです



すっかり人慣れしています

た農家の反応ですが、農家への聞き取り調査によれば、ヒナを連れたタンチョウの家族が農家周りにいつくことに6割以上の農家が歓迎傾向にあると言います。これが北海道のタンチョウが絶滅の危機を免れた大きな原因です。そして酪農地帯として発展してきた道東の環境変化に見事に適応したタンチョウには拍手を送るだけで、これを責めるわけにはいきませんよね。エゾオオカミがいた頃は今とは違って、タンチョウは人間が簡単には入り込めないような湿原で暮らしていたのでしょうか。こう考えると当時のタンチョウは今ほど沢山はいなかったのかもしれないですね。石狩川、十勝川、そして釧路川などの大河川の下流域に広がっていた大湿原の中で暮らしていて、渡りの時期になると人間の目に付く場所に出てきたのでしょうか。過去、現在、そして未来を見通しながら、どんな環境がタンチョウにとって理想的なのかを考えるのが、絶滅を防いだ後の保護の在り方なのでしょうが、それは私たちの後の世代に任せましょう。

北海道のタンチョウがこんなに人間にすり寄ってきたのにはもうひとつ理由があります。それは現在のタンチョウのヒナにとって最大の天敵であるオジロワシの存在です。オジロワシはエゾシカの増加とほぼ同時に個体数の増加が見られます。エゾシカの交通事故、狩猟による残滓など、ワシが最も飢えるはずの冬期間に充分な餌資源が用意されていると言う状態なので、繁殖個体は飛

躍的に増加しています。オジロワシの繁殖期の餌とえば、これまた近年急速に個体数が増えているアオサギやカモメなどのヒナや親鳥があります。道東ではアオサギのコロニーには必ずと言ってよいほど、これを餌場にするオジロワシが見られます。そして前述のエゾシカの増加です。こうしてオジロワシが道東で増えたことから、以前はタンチョウの重要な繁殖場所であった風蓮湖などの潟湖でのタンチョウの繁殖家族が大変少なくなっている上、繁殖成功率が大変低くなっているのです。このオジロワシの脅威から逃れるため、タンチョウは農家周りに、そして人間にすり寄る原因のひとつだと私は思っています。



オジロワシ（走古丹の防波堤で）

天敵から逃れて繁殖をするため人間にすり寄ってくる鳥は他にもいますよね。典型的なのはスズメとツバメでしょう。でも彼らは人間の暮らしが変わったので、この変化に着いていくことが難しくなりつつあります。昔、未だ北海道開拓の初期の頃には集落にスズメが現れると、やっと人間らしい生活ができ始めたと言います。これはシベリア開拓でも同じ思いだったようです。でも今、スズメが激減しているのは住宅事情によるものです。最近の住宅にはスズメが巣を作れるような隙間や穴はありません。このため、人間のすぐ側で暮らしてきたスズメやツバメは巣作りする場所がないので繁殖できないのです。スズメやツバメは最大の天敵であるカラスから巣を守るために人間のそばを選びました。でも今では意図したものではないにしろ、人間の側から縁を切ろうとしているのです。あらゆる動物はその増減が他の動物の増減に深くかかわっていると言うことでしょう。こうして自然を眺めていると増々面白い世界が見えてきます。今年をもっと面白い世界が見えてくるかもしれませんね。それには長生きをすることです。皆さんも健康には気を付けて長生きを目指しましょう。

〈句題〉 雪

「放^はつても

シャベル離さぬ湿り雪」

「雪^{ゆき}掻^かきの

オジサン欠けしご町内」

「朝^{あさ}昼^{ひる}晩^{ばん}疲れて眠き雪の山」



（室蘭市 白波瀬 稔歳）